徳島大学総合科学部 人間科学研究
第 31 巻 (2023) 1-16.

自己愛傾向がオタク活動の適応・不適応に与える影響
—パッションの観点から—

片山 知香[1] 小澤 怜奈[1] 甲田 宗良[2]

The effects of narcissism on adaptation and maladaptation associated with "Otaku" activities.
—From the perspective of passion—

Satoka KATAYAMA[1] , Rena OZAWA[1], and Munenaga KODA[2]

Abstract

In recent years, there has been a noticeable increase in individuals, primarily among young people, engaging in otaku activities. However, the mechanisms that differentiate adaptive and maladaptive otaku activities have not been examined. This study focuses on narcissism and passion as factors that distinguish between them. Specifically, we investigate whether differences in narcissism influence variations in passion for otaku activities. Furthermore, we aim to explore a causal model in which these differences in passion affect mood states during otaku activities, post-activity, and when activity is obstructed. The analysis results revealed that individuals driven by obsessive passion to engage in otaku activities tend to become ensnared by these activities and have difficulty switching between them and their daily lives. Future research should also focus on the type of "Otaku" activities and contents type.

Key Words: Otaku, Narcissism, Passion, Affect

---

1 徳島大学大学院創成科学研究科臨床心理学専攻 Department of clinical psychology, Graduate School of Sciences and Technology for Innovation, Tokushima University
2 徳島大学大学院社会産業理工学研究部 Graduate School of Technology, Industrial and Social Sciences, Tokushima University

徳島大学総合科学部 人間科学研究
第 31 巻 (2023) 1-16.

問題と目的

オタクとは

1. 従来のオタク活動

「オタク」という言葉は，アニメなどを愛好する者同士が二人称に「おたく」という言葉を用いていたことが語源とされている。1983 年にライターの中森明夫が，雑誌『漫画ブリッコ』のエッセイ内で，アニメファンを揶揄的に表現するために用い，その後，1986 年の連続幼女誘拐殺人事件を機に，その異常性や不適切性というネガティブな印象が世間に広がった（斎藤，2003）。

2. 現代のオタク活動

しかし，昨今は自身を「オタク」であると自認，自称し，様々な対象に対して熱心に「オタク活動」を行う者が増加している。オタク対象の幅について，五十嵐・小山（2016）でもオタクがマニア性を発揮する対象が拡大し，対象の範囲を定義するのが難しくなってきているとしている。また，矢野経済研究所（2018）の調査では，18～69 歳までの男女のうち，19.9%が何らかの「オタク」であり，2030 年には 40%にまで増加するという見積りを算出している。

このように，とくに若者の間でポピュラーな活動となっているオタク活動は，20 代以上の働く世代にもさらに広がっていくことが推察される。

3. 「オタク」と「オタク活動」の定義

「オタク」の定義については，様々な分野・年代で論考されており，一貫した見解は得られていない。オタクの歴史を踏まえると，時代ごとのオタク像を反映して，その定義を柔軟に変化させるべきである。

現代のオタクに関する考え方として，原田（2015a）はオタクの“ファン化”が進み，20 代前後の若者は，30 代以上の者が使用する「ファン」程度の意味合いで，「オタク」という言葉を用いているとしている。また，池田（2014）は，あまりお金と時間を使うことのできる状況にいない“趣味的弱者”を除外しないために，ファンであることの自覚がファンを定義するのに有用であると指摘している。このことから，本研究では，吉田（2010）のファンの定義を参考に，「特定の対象に対して，好意を持ち，その対象（オタク対象）が好きであると自分自身で認知している者」を「オタク」と定義する。また，その「オタク対象にかかわる行動」を「オタク活動」とする。

4. 「オタク活動」の適応・不適応

オタク行動の適応的な側面として，オタク対象が尊敬や憧れの対象となったり人生の手本として存在したりする点が挙げられる（小城，2006）。また，コンサートに参加すること，およびオタク仲間と共に参加することが，自身の不安や抑うつの改善に役立つことも示されている（西川・渋谷，2011）。ここ数年の若者たちは，自分の好きな「推し（一推しのメンバーを意味する略語“推しメン”をさらに略したもの。3 次元の人間だけでなく 2 次元のキャラクターにも使われる）」を見出し，推しが社会的な成功を得ることで，「成功した推しを推している自分」というアイデンティティを獲得するなどの指摘もあり（大山・長田，2020），もはや心理的な適応に欠かせないライフスタイルや行動の形態と捉えることができる。

しかしながら，「オタク活動」には不適

応的な側面も指摘されている。その代表例が，「オタク活動」とインターネット依存との関係である。例えば，山上他（2020）は，オタク特有のインターネット依存形成のプロセスがあることを実証している。さらに，ストーカー行為や，オタク対象が乗車していた新幹線を覗こうとオタクがホームに殺到し，発車妨害を起こすなどの過度な迷惑行為がメディアに取り上げられている。これらの行き過ぎた「オタク活動」は，周囲への悪影響もさることながら，本人の心理的不適応とも関連が想定される。

パッションとは

1. オタク活動を説明するパッション

このように「オタク活動」は，メンタルヘルスや生活において，適応的にも不適応的にも作用する実態がある。こうした現象を説明し，「オタク活動」の実証的研究を行うために，本研究では「パッション」という考え方を取り上げる。パッションとは，「個人が価値を置いており，多くの時間やエネルギーを費やす活動への強い意向」と定義される（Vallerand et al., 2003）。先行研究では，パッションを向ける活動内容として，受身的余暇や（漫画などを含む）読書が分類されている（久保・沢宮, 2018）。よって，オタク活動も十分にパッションが向けられる対象として機能すると考えられる。

2. 調和性パッションと強迫性パッション

パッションの内容や機能を説明する理論として，パッションの二元モデル（Vallerand et al., 2003）が提唱されている。これは，特定の活動への欲求をコントロールすることが可能で，生活活動に上手く組み込むことができる「調和性パッション」と，特定の活動への欲求をコントロールすることができず，生活との葛藤を引き起こす「強迫性パッション」の 2 つのパッションが存在することを説明するモデルである。

この二元モデルから，調和性パッションでは，純粋にその活動に没頭し，その活動を追い求めることに対する葛藤が生じにくいため，活動中も活動後もポジティブな感情を維持できると考えられる。また，活動が阻害された際も，活動の継続を諦める柔軟性があるとみなされる。しかし，強迫性パッションでは，活動に依存的なため，他の活動との間に軋轢が生まれやすい。例えば，パッションを向けた活動をしたくとも，当座しなければならない活動を行う必要がある時，意識や行動を柔軟に切り替えることができず，パッションを向ける行動を中断したことを強く思い悩む（羽鳥・石村, 2017）。

サッカーファンを対象に二元モデルの検証を行った研究（Vallerand et al., 2008）では，調和性パッションを持つファンはチームの勝利を祝ったり，心理的健康を予測したりしていたが，強迫性パッションを持つファンは試合に行くために仕事を失うリスクを冒したり，相手チームのファンを憎んだりすることが予測された。また，情報収集やオタク仲間を増やすなど，現代のオタク活動をする際に切り離すことのできないスマートフォンとの関連について，調和性パッションはスマホ依存内の，仮想生活志向や集中力の乱れなどの変数，不眠傾向に負の影響，精神的健康に正の影響を与えた。逆に，強迫性パッションはスマホ依存や不眠傾向に正の影響，精神的健康に負の影響を与えることが明らかにされている（久保・沢宮, 2021）。

以上の研究から，調和性パッションに駆られたオタク活動は生活にうまく組み込まれ, 心理的適応に結びつくが, 強迫性パッションに駆られたオタク活動は，不適応的な結果に至る可能性が想定される。

自己愛との関連

1. 自己愛の定義

では，強迫性パッションによるオタク活動に陥る背景には，どのような要因が影響しているだろうか。本研究では, 自己愛に着目した。自己愛とは, 広義に「自己を価値あるものとして体験しようとする心の働き」（上地・宮下, 2004）と定義されている。中村（2004）によると，自己愛は自分自身を大切に思うことや成功を収めようとする適応的な行動を促進する場合と，自己愛を傷つけないためにひきこもりに至ったり，内面の空虚感や自己憎悪などを引き起こす不適応的な場合がある。

2. パッションおよびオタク活動との関連

パッションとの関係について, 湯川(2003)は自己愛がメディアへの「主観的な熱中度」を高め，自己愛傾向とメディアへの熱中度合いは身体的攻撃を促進するとした。湯川（2003）における「主観的な熱中度」は,「個人が価値を置いており，多くの時間やエネルギーを費やす活動への強い意向」に相当すると考えられ，自己愛とパッションの関係の傍証と考えられる。

オタク活動との関係としては,「自己対象」との関連が予想される。白井（2005）は, Kohut（1971，1977，1984）の主張を参考に, 自己対象を「思い通りに自己愛を満たしてくれる外的な対象」とし, この自己対象によって自己愛が満たされる体験のことを「自己対象体験」と説明した。自己愛は一般的に青年期に高まるとされており（小此木, 1992), オタク活動を精力的に行うようになる世代とも重なる。このような知見を鑑みると，肥大しつつある自己愛を補完するためにオタク対象が自己対象として存在していると推察できる。

また, 先行研究によって, 自己愛という人格特性は，ファン対象の有無に影響を与えることが示されている（吉田，2010)。海外の研究でも，自己愛傾向と自分自身をオタクだと認識する傾向，オタク活動との間に正の相関が示されている（Andrews & McCann, 2020)。これらの知見から，自己愛傾向の高さは, オタク対象の存在や, オタク活動を精力的に行っていることを予測すると推察される。

3. 誇大型自己愛と過敏型自己愛

ただし，Gabbard（1989）などが指摘するように，自己愛には他者の反応を気にしない「誇大型」と, 他者の反応に過敏で人の目を気にする「過敏型」の 2 つのタイプが存在する。鈴木（2017）では，男女ともに「誇大型自己愛」と依存性との間に相関は認められなかったが,「過敏型自己愛」においては, 男女ともに「依存欲求」との間に有意な強い正の相関を示している。自己対象については, 過敏型自己愛傾向群の方が「理想化自己対象体験（すばらしい対象の一部分としてとして自己を同一視させてくれるような体験)」と「鏡映自己対象体験（すばらしい自己像を鏡のように映し返してくれる体験)」において，高い得点を示した（鈴木, 2017)。また,「過敏型自己愛」と自己像の不安定性や理想自己－現実自己の不一致に関連があるという指摘もある（上地・宮下,

2009)。これらの研究から，自己愛の中でも「過敏型自己愛」傾向を持つ者が理想の自己を補完するためにオタク対象に対して依存的な態度を取りやすく，強迫性パッションによるオタク活動に陥りやすいと考えられる。しかし，これまでのパッションやオタク活動の研究で自己愛を測定する際には，誇大型自己愛の測定に特化した尺度を使用するに留まっている。

問題提起と目的

国内の先行研究において，自己愛と何らかの活動に対する「熱中度」や「依存」との関連を検討する場合，自己愛の型が考慮されておらず，オタク活動の適応・不適応を分かつ要因の精緻な検討には至っていない。オタク行動の適応・不適応のメカニズムを明らかにすることは，より身近な行動によるメンタルヘルスの保持増進において有益な知見をもたらすと考えられ，臨床的心理学的に意義があると考える。

したがって，本研究では，自己愛傾向の違いが，オタク活動に向けるパッションの違いに影響を及ぼし，さらに，そのパッションの違いによってオタク活動中・活動後・活動が阻害された時の気分状態に影響を与えるという因果モデルを検討することを目的とする。

仮説

1. 誇大型・過敏型どちらの型においても，自己愛傾向が高いとオタク対象を持っている。
2. 過敏型自己愛傾向は誇大型自己愛傾向より強迫性パッションに正の影響を与える。
3. 調和性パッションに駆られてオタク活動を行う人は，活動中，活動後にポジティブ感情が高まる。
4. 強迫性パッションに駆られてオタク活動を行う人は，活動中，活動後にネガティブ感情が高まる。
5. 調和性パッションに駆られてオタク活動を行う人は，活動が阻害されてもポジティブ感情の低下が生じにくい。

方法

対象者

2022 年の 11 月～12 月にかけて，徳島県内の大学生 230 名を対象にアンケート調査を行った。そのうち，回答の指示に即していない 24 名のデータを除外した結果，有効回答者数は 206 名（女性 138 名，男性 64 名，回答しない 3 名，その他 1 名：平均年齢 20.56，*SD*＝1.42）であった。

指標

1. 基本情報

年齢，性別，オタク対象の有無，オタク対象の性別，オタク対象の職種（ジャンル），オタク活動歴，オタク活動に費やす月間の費用の回答を求めた。

2. パッション尺度日本語版（久保・沢宮，2018）

個人が有するオタク活動への情熱の程度について測定した。「強迫性パッション」，「調和性パッション」，「パッション基準」の 3 因子 17 項目から構成されており，7 件法で評定を求める自己記入式尺度である。

3. 日本語版 Positive and Negative Affect Schedule（日本語版 PANAS：佐藤・安田，2001）

オタク活動について，その活動中，活動後，活動が阻害された時の 3 場面それぞれの気分状態について回答を求めた。「ポジティブ感情（PA)」,「ネガティブ感情（NA)」の 2 因子 16 項目から構成されており，6 件法で評定を求める自己記入式尺度である。

4. 自己愛人格目録短縮版（Narcissistic Personality Inventory-Short Version: NPI-S: 小塩，1999）

誇大型自己愛傾向を測定する指標として使用した。「優越感・有能感」,「注目・賞賛欲求」,「自己主張性」の 3 因子 30 項目から構成されており， 5 件法で評定を行う自己記入式尺度である。

5. 自己愛的脆弱性尺度短縮版（Narcissistic Vulnerability Scale: NVS: 上地・宮下，2009）

自己愛の過敏性・脆弱性について測定する指標として使用した。「承認・賞賛への過敏さ」,「自己顕示抑制」,「自己緩和不全」,「潜在的特権意識」の 4 因子 20 項目から構成されており，5 件法で評定を行う自己記入式尺度である。

手続き

Google Form を用いた web 調査を実施した。Google Form へアクセスするための QR コード及び URL を記載した調査依頼文書を大学構内に掲示，あるいは授業担当者に研究の趣旨を説明，同意を得て授業中に配布した。

分析

統計解析には，HADon Ver.17.206（清水，2016）を使用した。

倫理的配慮

本研究は，徳島大学大学院社会産業理工学研究部社会総合科学域研究倫理審査委員会の承認を得て実施された（受付番号 277)。

具体的には，研究への参加は任意で，理由なく中断できること，またそれによる修学上の不利益は生じないことを，調査依頼文書および Google Form 内に明記した。また，得られたデータは統計的に処理し，個人が特定できる形で使用しないこと，収集したデータを研究以外の目的で使用しないことも明記した。以上の研究に関する注意事項について，Google Form 内で改めて質問項目に回答させる形で確認させ，研究参加の同意を得た。

結果

1. 各指標の記述統計

Table1 に記述統計量を示す。

Table 1
各指標の記述統計

	n	*M*	*SD*
年齢	206	20.56	1.42
平均費用	132	5027.27	10186.06
パッション尺度			
強迫性パッション	132	22.68	7.40
調和性パッション	132	31.82	4.96
パッション基準	132	28.69	4.33
PANAS			
活動中NA	132	14.87	5.76
活動中PA	132	31.07	6.99
活動後NA	132	12.23	5.65
活動後PA	132	29.74	9.09
活動阻害NA	132	19.75	7.70
活動阻害PA	132	13.34	5.71
NPI			
NPI（合計）	206	94.86	17.37
優越感・有能感	206	33.28	7.71
注目・賞賛欲求	206	30.31	7.55
自己主張性	206	31.27	6.92
NVS			
NVS（合計）	206	56.81	14.22
自己顕示欲性	206	12.03	4.69
自己緩和不全	206	13.67	5.39
潜在特権意識	206	17.52	4.36
承認・賞賛過敏性	206	13.58	4.66

その他の個人特性について，オタク対象の有無は，有りと回答した者が 132 名（64.1%），無しが 74 名（35.9%）であった。オタク対象有りと答えた者の中で，オタク対象の性別を男性と回答した者が 77 名（58.3%），女性 29 名（22%），その他（グループ，性別なしなど）26 名（19.7%）であった。オタク対象の職種（ジャンル）は「アイドル」と回答した者が 34.1%，「アニメ・ゲーム・漫画のキャラクター」が 31.8%，「Vtuber」が 9.8%，「ミュージシャン」が 9.1%，「YouTuber」が 6.1%，「お笑いタレント」が 3%，「声優」が 2.3%，「スポーツ選手」が 1.5%，「俳優」「漫画家」がともに 0.8%であった。「作家・エッセイスト」「画家・イラストレーター」の回答はなく，その他の回答として，「ゲーム実況者」の回答が 1 件あった。オタク歴は，「半年未満」と回答した者が 0.8%，「半年以上 1 年未満」が 8.3%，「1 年以上 2 年未満」が 18.9%，「2 年以上 4 年未満」が 27.3%，「4 年以上 6 年未満」が 14.4%，「6 年以上 10 年未満」が 18.2%，「10 年以上」が 12.1%であった。

2. 相関分析

自己愛とパッションの関連

オタク活動に向ける強迫性パッションと調和性パッションおよび誇大型自己愛傾向，過敏型自己愛傾向との相関を Table2 に示す。

その結果，強迫性パッションと誇大型自己愛傾向の合計得点および誇大型自己愛傾向のすべての下位尺度得点との間に有意な負の相関が示された（合計得点：$r(130) = -.27$, $p<.01$；優越感・有能感：$r(130) = -.24$, $p < .01$；注目・賞賛欲求：$r(130) = -.19$, $p < .05$；自己主張性：$r(130) = -.19$, $p < .05$）。また，過敏型自己愛傾向の合計得点および一部の下位尺度得点との間に有意な負の相関が示された（合計得点：$r(130) = -.47$, $p < .01$；優越感・有能感：$r(130) = -.49$, $p < .01$；自己主張性：$r(130) = -.44$, $p < .01$）。注目・賞賛欲求に関しては，有意傾向が示された（$r(130) = -.17$, $p < .10$）。

一方，強迫性パッションと誇大型自己愛傾向との間には，一部の下位尺度との間にのみ，負の相関が有意傾向であった。（自己緩和不全：$r(130) = -.15$, $p < .10$）。また，過敏性自己愛傾向との間には相関が見られなかった。

Table 2
パッションと自己愛傾向との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
パッション尺度											
1.強迫性パッション											
2.調和性パッション	.14										
NPI-S											
3.NPI-S（合計）	-.27 **	-.47 **									
4.優越感・有能感	-.24 **	-.49 **	.80 **								
5.注目・賞賛欲求	-.19 *	-.17 +	.72 **	.30 **							
6.自己主張性	-.19 *	-.44 **	.80 **	.55 **	.35 **						
NVS											
7.NVS（合計）	-.12	.02	.20 *	-.08	.48 **	.06					
8.自己顕示欲性	-.09	.12	.02	-.18 *	.23 **	.01	.75 **				
9.自己緩和不全	-.15 +	.01	.19 *	.00	.35 **	.10	.78 **	.42 **			
10.潜在特権意識	-.03	-.14	.25 **	.10	.35 **	.13	.70 **	.34 **	.39 **		
11.承認・賞賛過敏性	-.08	.09	.14	-.17 *	.55 **	-.06	.80 **	.56 **	.47 **	.42 **	

** p < .01, * p < .05, + p < .10

3. ロジスティクス回帰分析

(1) 誇大型自己愛傾向

年齢, 性別, 誇大型自己愛傾向の得点を独立変数，オタク対象の有無を従属変数としたロジスティクス回帰分析を行った。その結果，性別（$OR = 3.38$, $p < .001$），誇大型自己愛傾向（$OR = 1.02$, $p < .05$）はオタク対象が存在することを有意に予測した。

その後，誇大型自己愛傾向の下位尺度を独立変数に加えてロジスティクス回帰分析を行った（Table3）。その結果，優越感・有能感（$OR = 1.05$, $p < .10$）はオタク対象がいることに対して，有意傾向を示した。

Table 3
オタク対象の有無を従属変数にしたロジスティクス回帰分析（誇大型自己愛傾向）

説明変数	*OR*	[95%CI]
年齢	1.08	.87－1.33
性別	3.52**	1.85－6.71
NPI-S		
優越感・有能感	1.05+	1.00－1.10
注目・賞賛欲求	1.01	.97－1.05
自己主張性	1.01	.96－1.06
Cox & Snell R^2	.09	
Nagelkerke R^2	.12	
χ^2	19.08**	

** p < .01, * p < .05, + p < .10

(2) 過敏型自己愛傾向

同様に，過敏型自己愛傾向の得点を独立変数，オタク対象の有無を従属変数としたロジスティクス回帰分析を行った。その結果，「性別」（$OR = 2.75$, $p < .01$）はオタク対象がいることを有意に予測し，「過敏型自己愛傾向」（$OR = .97$, $p < .01$）はオタク対象がいないことを有意に予測した。

その後，過敏型自己愛傾向の下位尺度を独立変数に加えてロジスティクス回帰分析を行った（Table4）。その結果，承認・賞賛過敏性（$OR = .91$, $p < .05$）は，オタク対象がいないことを有意に予測し，自己顕示抑制（$OR = .93$, $p < .10$）は，オタク対象がいないことに有意傾向が示された。一方，自己緩和不全（$OR = 1.09$, $p < .05$）はオタク対象が存在することを有意に予測した。

Table 4
オタク対象の有無を従属変数にしたロジスティクス回帰分析（過敏型自己愛傾向）

説明変数	*OR*	[95%CI]
年齢	1.04	.84－1.29
性別	3.46**	1.69－7.07
NVS		
自己顕示欲性	.93+	.86－1.00
自己緩和不全	1.09*	1.01－1.17
潜在特権意識	.98	.90－1.06
承認・賞賛過敏性	.91*	.83－.99
Cox & Snell R^2	.10	
Nagelkerke R^2	.13	
χ^2	20.25**	

** p < .01, * p < .05, +p < .10

4. 共分散構造分析

(1) 自己愛とパッション

誇大型自己愛傾向と過敏型自己愛傾向が，オタク活動に向けるパッションに与える影響を検討するために共分散構造分析を行った（Figure1～3）。誇大型自己愛傾向から強迫性パッションに有意な負のパス（β=-.11, $p < .01$）が，調和性パッションにも有意な負のパス（β=-.14, p<.01）が示された。過敏型自己愛傾向から強迫性パッションには有意なパスが示されず（β=-.03, *n.s.*），調和性パッションにも有意なパスは示されなかった（β=.04, *n.s.*）。

(2) 「活動中」の気分状態

強迫性パッションと調和性パッションが，オタク活動中のネガティブ感情・ポジティブ感情に与える影響を検討するために共分散構造分析を行った。以下に仮説に即したモデル（Figure 1）を示す。

仮説に即したモデルの適応度指数は，GFI = .92, AGFI = .79, CFI = .74, RMSEA = .17 であった（Figure 1）。強迫性パッションから活動中のネガティブ感情へのパスは有意ではなかった（β= .11, *n.s.*）。しかし，調和性パッションから活動中のポジティブ感情に有意な正のパスが示された（β= .69, p < .01）。

仮説を補完するモデルの適応度指数は，GFI = .89, AGFI = .71, CFI = .57, RMSEA = .21 であった。強迫性パッションから活動中のポジティブ感情に有意な正のパスが示された（β= .31, p < .01）。また，調和性パッションから活動中のネガティブ感情への負のパスが有意傾向を示した（β = -.19, p < .10）。

(3) 「活動後」の気分状態

強迫性パッションと調和性パッションが，オタク活動後のネガティブ感情・ポジティブ感情に与える影響を検討するために共分散構造分析を行った。以下に仮説に即したモデル（Figure 2）を示す。

仮説に即したモデルの適応度指数は，GFI = .95, AGFI = .86, CFI = .83, RMSEA = .12 であった（Figure 2）。強迫性パッションから活動後のネガティブ感情に有意な正のパスが示された（β = .19, p < .01）。また，調和性パッションから活動後のポジティブ感情に有意な正のパスが示された（β = .69, p < .01）。

仮説を補完するモデルの適応度指数は，GFI = .91, AGFI = .75, CFI = .61, RMSEA = .19 であった。強迫性パッションから活動後のポジティブ感情に有意な正のパスが示された（β = .30, p < .01）。また，調和性パッションから活動中のネガティブ感情に有意な負のパスが示された（β = -.23, p < .05）。

(4) 「活動が阻害された時」の気分状態

強迫性パッションと調和性パッションが，オタク活動が阻害された時のネガティブ感情・ポジティブ感情に与える影響を検討するために共分散構造分析を行った。以下に仮説に即したモデル（Figure 3）を示す。

仮説に即したモデルの適応度指数は，GFI = .96, AGFI = .90, CFI = .89, RMSEA

Figure 1
パッションと活動中の気分状態および自己愛の関係

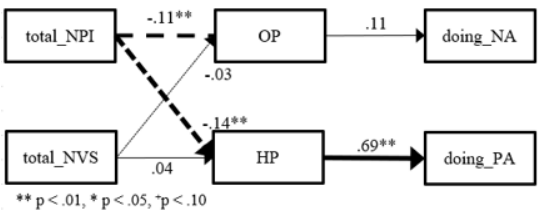


Figure 2
パッションと活動後の気分状態および自己愛の関係

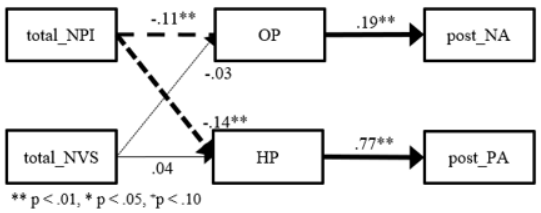
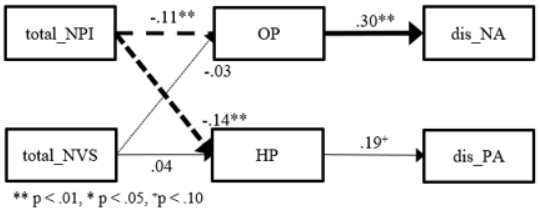


Figure 3
パッションと活動阻害時の気分状態および自己愛の関係



= .09 であった（Figure 3）。強迫性パッションから活動が阻害された時のネガティブ感情に有意な正のパスが示された（β = .30, p < .01）。また，調和性パッションから活動が阻害された時のポジティブ感情への正のパスが有意傾向を示した（β = .19, p < .10）。

仮説を補完するモデルの適応度指数は，GFI = .94, AGFI = .84, CFI = .72, RMSEA = .13 であった。強迫性パッションから活動後のポジティブ感情への正のパスが有意傾向を示した（β = .11, p < .10）。また，調和性パッションから活動中のネガティブ感情へのパスは有意ではなかった（β = .13, *n.s.*）。

考察

本研究の目的は, 自己愛傾向の違いが, オタク活動に向けるパッションの違いに影響を及ぼし, さらに, そのパッションの違いによってオタク活動中・活動後・活動が阻害された時の気分状態に影響を与えるという因果モデルを検討することであった。

自己愛傾向とオタク対象の有無の関係

まず，仮説 1 の「誇大型・過敏型どちらの型においても，自己愛傾向が高いとオタク対象を持っている」を検討するために, ロジスティクス回帰分析を行った。その結果, 誇大型自己愛傾向はオタク対象がいることを有意に予測し，先行研究の知見とも一致した（吉田, 2010; Andrews & McCann, 2020）。下位尺度では,「優越感・有能感」が，オタク対象がいることに影響を及ぼしていた。

しかしながら，過敏型自己愛傾向はオタク対象がいないことを有意に予測し，仮説とは異なる結果となった。下位尺度では,「承認・賞賛過敏性」,「自己顕示抑制」の順にオタク対象がいないことを予測した。一方で,「自己緩和不全」はオタク対象がいることを予測し，過敏型自己愛傾向も一部ではオタク対象がいることを予測するという結果となった。

このような結果となった背景に，自己愛傾向の違いが，本研究で用いたオタクの定義に対する認識に，ズレを生じさせた可能性が考えられる。誇大型自己愛傾向の中でも，とくに「優越感・有能感」が予測要因として抽出されたが, この尺度は, 他者からの信頼を確信したり，他者への影響を与えることができるという項目で構成されている。これは，自分の好きなことを他者の目を気にせずに，堂々と行うことができる傾向を反映したものと推察できる。そのため, 誇大型自己愛傾向を持つ者は，オタク対象がいると回答しやすいと考えられる。同じように考えると, 過敏型自己愛傾向の中でも, 他者からの共感や理解を求める「自己緩和不全」が, オタク対象が存在することの予測要因になり得たのも，自分が好きな活動を受け入れてほしいという気持ちの表れを反映した項目だったことが理由と考えられた。

反対に, 過敏型自己愛傾向の中の「自己顕示抑制」と「承認・賞賛過敏性」はオタク対象がいないことを予測した。その背景には, 他者の反応を気にする性質が関係しているかもしれない。廣瀬（2020）は，SNS での情報収集が一般的になった昨今，他者が希少なグッズを投稿したり，ライブのために遠征を繰り返したりしている様子を見て，心理的に切迫感を感じる若者がいるとしている。このような切迫感は他者を気にしや

すい過敏型自己愛傾向を持つ者が特に感じやすいと考えられる。

本研究の指標のように，オタク対象の有無を問われた際，過敏型自己愛傾向を持つ者は，他のオタクのようにオタク対象に対して，時間や消費をかけていないかもしれないと考えやすいと推察される。さらに，他のオタクからオタク活動の頻度を批判されるのを恐れて，オタクを名乗ることはハードルが高いと感じている可能性がある。実際に，廣瀬（2020）は消費を煽ったり、消費する経済力がないことに劣等感を抱かせるような発言をしたりする者の存在を指摘している。過敏型自己愛傾向を持つ者は，オタク活動を行う中でも，他者の目線という脅威に曝されていると考えることができる。

このことから，過敏型自己愛傾向を持つ者は上記の定義でも，自分自身をオタクと呼ぶには値しないと考えた可能性がある。

自己愛傾向の違いとオタク活動に向けるパッションの関連

次に，仮説 2 の「過敏型自己愛傾向は誇大型自己愛傾向より強迫性パッションに正の影響を与える」を検討するために，共分散構造分析を行った。その結果，誇大型自己愛傾向は調和性パッションと強迫性パッションの双方に負のパスが示され，相関係数も負の相関が有意であった。また，過敏型自己愛傾向については，いずれのパッションにも有意な影響を及ぼさなかった。さらに，相関係数も認められなかった。これらの結果から，仮説 2 は支持されない結果となった。

誇大型自己愛傾向が両パッションに負の影響を及ぼすことは，この自己愛傾向の型が，オタク対象がいることを予測した先の結果と矛盾している。この結果が導かれた要因に，誇大型自己愛傾向を持つ者は，オタク対象を自身の個性を発揮するために用い，オタク対象に関連する消費は，重要ではないと感じていることが考えられる。原田（2015b）は，一般人とのギャップを作り，自分を差別化するために，にわかオタクが増加していると言及している。誇大型自己愛傾向を持つ者は，下位尺度の注目・賞賛欲求などの観点から，より手軽に個性を発揮できるオタクになることを好むと考えられる。さらに，「時間や労力をかけずにオタクぶれる」ことがにわかオタクにとって重要であるという指摘（原田, 2015b）を踏まえると，個性を発揮することを目的としたオタク活動は，パッションで予測できないと考えられる。

また，自己愛傾向が高い者は，根底にある“劣っているという感覚”について，自身を誇大的に示して覆い隠すという特徴が指摘されている（Bosson et al., 2008）。本研究でも，社会的望ましさのために，自己愛を正確に測定できなかった可能性がある。

過敏型自己愛傾向とパッションとの間に関連がなかった理由は，そもそもこの自己愛の型が，オタク対象がいないことを有意に予測していたために，オタク活動に対するパッションも無関連であったと考えられる。

調和性パッションとオタク活動中，オタク活動後の気分との関連

次に，仮説 3 の「調和性パッションに駆られてオタク活動を行う人は，活動中，活動後にポジティブ感情が高まる」を検討するために，共分散構造分析を行った。その結

果, 調和性パッションから, 活動中のポジティブ感情および活動後のポジティブ感情に対して, 有意な正のパスが示された。これらの結果から，仮説 3 は支持された。

よって，調和性パッションのもと行われるオタク活動は，メンタルヘルスに適応的な影響をもたらすことが示唆された。これは，羽鳥・石村（2017）より，調和性パッションでは, 純粋にその活動に没頭し, その活動を追い求めることに対する葛藤は芽生えないため，活動中も活動後もポジティブな感情を生起しているためであると推察される。

強迫性パッションとオタク活動中，オタク活動後の気分との関連

次に，仮説 4 の「強迫性パッションに駆られてオタク活動を行う者は, 活動中, 活動後にネガティブ感情が高まる」を検討するために，共分散構造分析を行った。その結果, 強迫性パッションから, 活動後のネガティブ感情に対しては有意な正のパスが示されたが，活動中のネガティブ感情には影響がないという結果になった。逆に, 強迫性パッションから, 活動中, 活動後ともにポジティブ感情が生起された。

強迫性パッションでもポジティブ感情が生起された背景に，パッションを向ける活動の中で, オタク活動の多くが, 受身的余暇に該当することが要因と考えられる。受身的余暇とは, 映画を見たり, 音楽を聴いたりなど，受動的な要素の大きい余暇活動のことである。久保・沢宮（2018）では，受身的余暇にパッションを向けたサンプルと，それ以外の活動にパッションを向けたサンプルによる，強迫性パッションとポジティブ感情との間の相関を算出した。その結果, 受身的余暇にパッションを向けたサンプルにおいて，有意な中程度の正の相関が示されたが，それ以外の活動にパッションを向けたサンプルでは，有意な相関が示されなかった（久保・沢宮, 2018）。よって，本研究でも受身的余暇の側面を大きく持っているオタク活動を対象としたために，先行研究と同様，強迫性パッションからポジティブ感情へのパスが示されたと推察される。

また, オタク活動は他の活動と比べて, より好意的な活動であるだけでなく，尊敬や憧れの対象（小城, 2006）にもなり得るものに対する活動である。そのため, 強迫的なオタク活動でもポジティブ感情が生起しやすかったのではないかと考えられる。

しかし, ネガティブ感情に関しては, 強迫性パッションから活動後のネガティブ感情に有意な正のパスが予測された。一方, 調和性パッションから活動中，活動後のネガティブ感情には有意な負のパスが見られた。とくに，活動後のネガティブ感情についてはパッションの違いによって異なる結果となっていた。

以上の結果から，どちらのパッションのもとでオタク活動を行っても，活動後のポジティブ感情を生起させることが示された。オタク活動には, 調和的であろうと, 強迫的であろうと，その活動によってポジティブ感情を生起させる性質があることが示唆された。これは, そもそもオタク活動が受身的余暇に分類される点から説明される。

一方で，強迫性パッションは活動後のネガティブ感情が生起されていることを有意に予測した。これは, 調和性パッションが, ネガティブ感情に有意な負のパスを予測し

た結果とは, 対照的なものとなった。このような差が生まれた要因に，強迫性パッションによってオタク活動に依存的になやすく, 活動が終了した後もスムーズに気持ちを切り替えることができなくなかった可能性が考えられる。結果として, 強迫性パッションに駆られたオタク活動は，調和性パッションと比較して，適応的に作用していないと考察できる。

調和性パッションとオタク活動が阻害された時のポジティブ感情との関連

最後に，仮説 5 の「調和性パッションに駆られてオタク活動を行う人は，活動が阻害されてもポジティブ感情の低下が生じにくくなる」を検討するために共分散構造分析を行った。その結果, 調和性パッションから活動が阻害された時のポジティブ感情に有意な正のパスが見られた。よって, 仮説 5 は支持される形となった。しかし, 調和性パッションよりも程度は低いものの，強迫性パッションもポジティブ感情に有意な正のパスが見られた。

そこで，活動が阻害された時のネガティブ感情へのパスで比較すると，調和性パッションからネガティブ感情との間に有意なパスがない一方，強迫性パッションからネガティブ感情へは，有意な負のパスが示された。

以上の結果から，どちらのパッションのもとで, オタク活動を行っても, 活動が阻害された時のポジティブ感情には違いが認められないことも示された。これも活動後のポジティブ感情と同様，オタク活動が受身的余暇に分類される点から説明されると推察される。

一方で, 調和性パッションは, 活動阻害時のネガティブ感情に影響を与えなかった。これは, 強迫性パッションが, 活動が阻害された時のネガティブ感情に有意な正のパスを予測した結果とは，対照的なものとなった。このような差が生まれた要因に, 調和性パッションの方が，活動が阻害された場合に, オタク活動に囚われず, 切り替えることできた可能性が推察される。よって, 調和性パッションによるオタク活動は，活動を阻害されてもネガティブになりすぎず，適応的であると考察できる。

本研究の限界と今後の展望

本研究の限界点の 1 点目として，自己愛傾向の測定が正確に行えなかった可能性が高い点が挙げられる。Bosson et al (2008) より，自己愛傾向が高い者は，根底にある“劣っているという感覚”について, 自身を誇大的に示して覆い隠すという特徴が指摘されている。本研究では, 顕在指標で自己愛傾向を測定したため，正確な自己愛を測定できなかった可能性がある。このことは, 今回の仮説モデルの適合度が十分でなかったことにも繋がっていると考えられ, 今後は, 潜在的な自己愛を測ることの出来る尺度の使用を検討する必要がある。

また, モデル適合度の低さに関して, 特に自己愛の当てはまりの悪かった。そのため, 今後の研究では，パッションを左右するパーソナリティとして，自己愛傾向以外のパーソナリティも説明変数に加えて，検討していく必要がある。

さらに, 2 点目として, 本研究ではオタク活動について厳密に定義したり，どのような活動を想像したかを問わなかった。その

ため，回答者それぞれが想像したオタク活動が大きく異なっていた可能性もある。今後は，参加者がオタク活動をどのように認識していたのか, また, そのオタク活動の違いがメンタルヘルスの増減に影響を与えていたのかを検討する必要がある。

まとめ

本研究では，誇大型自己愛傾向はオタク対象がいることを予測し，過敏型自己愛傾向は概ねオタク対象がいないことを予測した。また, 誇大型自己愛傾向が高いとオタク活動に向けるパッションは低下し，過敏型自己愛傾向はオタク活動に向けるパッションに影響を与えないことが示唆された。さらに，オタク活動における 3 時点での感情状態については，主にネガティブ感情への影響に差が現れた。強迫性パッションは, 調和性パッションと比較して，活動中にネガティブ感情が減少せず，活動後と活動阻害時にネガティブ感情が生起されることが示された。

このことから，調和性パッションに駆られてオタク活動を行うことは，適応的に作用している一方，強迫性パッションに駆られてオタク活動を行うことは，メンタルヘルスに適応的に作用しているとは言えないことが示唆された。今回得られた知見は, オタク行動の適応・不適応のメカニズムを明らかにする一助として，より身近な行動によるメンタルヘルスの保持増進を考える上で, 有益な知見をもたらしたと考えられる。

引用文献

Andrews, T.W., McCann, S.H.（2022）. The relation of geek culture engagement to narcissism and self-esteem: Potential roles of admiration, rivalry, status, and inclusion. *Current Psychology 41*, 1921–1935.

Bosson, J.K., Lakey, C.E., Campbell, W.K., Zeigler-Hill, V. Jordan, C.H., & Kernis, M.H. (2008). Untangling the links between narcissism and self-esteem: A theoretical and empirical review. *Social and Personality Psychology Compass*, *2*, 1415-1439.

Gabbard, G.O.（1989）. Two subtypes of narcissistic personality disorder. *Bulletin of Menninger Clinic*, *53*, 527-532.

原田 曜平（2015a）. 新・オタク経済：3 兆円市場の地殻大変動　朝日新聞出版

原田 曜平（2015b）. 若者の間に「エセオタク」が激増しているワケ―知識も消費金額も少ないのに，オタクを自称― 東洋経済 ONLINE　Retrieved January 30，2023 from https://toyokeizai.net/articles/-/92036

羽鳥 健司・石村 郁夫（2017）. 情熱に関する心理学研究の概観―Vallerand の情熱研究を中心に―　東京成徳大学臨床心理学研究，*17*，198-208.

廣瀬 涼（2020）. 若者のオタク化に対する警鐘－若者の考える「オタ活」とオタクコミュニティの現実　ニッセイ基礎研究所　Retrieved January 24, 2023 from https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=65681?pno=2&site=nli

五十嵐 輝・小山 友介（2016）.「おたく」

的因子の抽出と「おたくステレオタイプ」の構造の検証―現代の「おたく」と「非おたく」― 社会・経済システム，*37*，67-76. https://doi.org/10.20795/jasess.37.0_67

池田 太臣（2014）．アイデンティティとファン活動―ファンとは誰か？― 甲南女子大学研究紀要，*50,* 73-81.

株式会社トランス（2021）．「推し活」事情を学ぶ①推し活って何するの？編 TRANS Retrieved September 22, 2022 from https://www.trans.co.jp/column/goods/oshikatsu_study1/

上地 雄一郎・宮下 一博（編）（2004）．もろい青少年の心：自己愛の障害：発達臨床心理学的考察 北大路書房

上地 雄一郎・宮下 一博（2009）．対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性，自己不一致，自尊感情の関連性 パーソナリティ研究，*17*（3），280-291. https://doi.org/10.2132/personality.17.280

Kohut, H. (1971). *The analysis of the self.* International Universities Press. （コフート，H. 水野信義・笠原 嘉（監訳）近藤 三男・滝川 健司・小久保 勲（共訳）(1994). 自己の分析 みすず書房）

Kohut, H. (1977). *The restoration of the self.* International Universities Press. （コフート，H. 本城秀次・笠原 嘉（監訳）本城 美恵・山内 正美（共訳）(1995). 自己の修復 みすず書房）

小城 英子（2005）．ファン心理の構造 （2）ファン対象職業によるファン心理・ファン行動の比較 関西大学大学院人間科学，*64,* 177-195.

久保 尊洋・沢宮 容子（2018）．パッション尺度日本語版の作成 および信頼性・妥当性の検討 心理学研究，*89,* 490-499. https://doi.org/10.4992/jjpsy.89.17205

久保 尊洋・沢宮 容子（2021）．パッションがスマートフォン依存，精神的健康，不眠傾向に与える影響 学校心理学研究，*20*(2)，129-137. https://doi.org/10.24583/jjspedit.20.2_129

Maniaci, M. R. & Rogge, R. D. （2014）. Caring about carelessness: Participant inattention and its effects on research. *Journal of Research in Personality*, *48*, 61-83. https://psycnet.apa.org/doi/10.1016/j.jrp.2013.09.008

松島 勝人（2018）2030 年「オタク人口比率 40%」へ!? 株式会社矢野経済研究所 Retrieved December 1，2022 from https://www.yano.co.jp/opinion/180801.html

向井 暁・竹谷 真詞・川原 明美・川口 あかね（2016）．ファン態度とファン行動の関連性 研究紀要, *64*，233-257.

中村 晃（2004）．健全な自己愛と不健全な自己愛 千葉商大紀要，*42,* 1-20.

西川 千登世・渋谷 昌三（2011）．音楽ファンのコンサート参加行動による精神

的健康度への影響―参加頻度による検討― 目白大学心理学研究，*7,* 45-53.

大山 翔平・長田 麻衣（2020）.「ヲタ活」に見る若者の消費行動と心理―享楽志向と承認欲求が支える献身的消費― 日本マーケティング学会カンファレンス・プロシーディングス，*9,* 60-70.

小此木 啓吾（1992）. 自己愛人間 ちくま学芸文庫

小塩 真司（1999）. 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究，*8,* 1-11. https://doi.org/10.2132/jjpjspp.8.1_1

斎藤 環（2003）. 戦闘美少女の精神分析 ちくま文庫

佐藤 徳・安田 朝子（2001）. 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, *9(2),* 138-139. https://doi.org/10.2132/jjpjspp.9.2_138

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.

白井 大介（2005）. 自己愛と自己対象：「自己対象体験」尺度作成の試み（1） 日本パーソナリティ心理学会発表論文集，*14*，153-154. https://doi.org/10.24534/amjspp.14.0_153

鈴木 彩加（2017）. 青年期の自己愛傾向と依存性および自己対象体験との関連 桜美林大学臨床心理学専攻修士論文（未公刊）

Vallerand, R. J., Blanchard, C., Mageau, G. A., Koestner, R., Ratelle, C., Léonard, M., & Gagné, M., Lagacé-Labonté, C., Marsolais, J. (2003). Les Passions de l' Âme: On obsessive and harmonious passion. *Journal of Personality and Social Psychology, 85*, 756-767.

Vallerand, R. J., Ntoumanis, N., Philippe, F. L., Lavigne, G. L., Carbonneau, N., Bonneville, A., Maliha, G. (2008). On passion and sports fans: A look at football. *Journal of Sports Sciences, 26*, 1279– 1293. https://doi.org/10.1080/02640410802123185

山上 尚彦・斎藤 環・大谷 保和・森田 展彰（2020）. 外向性・動機・消費類型に応じたオタクの幸福感の検討 アディクションと家族，*36,* 60-70.

吉田 未来（2003）. 自己愛傾向とファン行動との関連性について 北星学園大学大学院論集，*1,* 113-126.

湯川 進太郎（2010）. 青年期における自己愛と攻撃性―現実への不適応と虚構への没入をふまえて― 犯罪心理学研究，*41,* 27-36. https://doi.org/10.20754/jjcp.41.2_27